

雀こ

井伏鱒二へ。津軽の言葉で。

太宰治
青空文庫

長え長え昔むがしこ噺、知らへがな。

山の中に橡とちの木いつぽんあつたずおん。

そのてつペンさ、からす一羽来てとまったずおん。

からすあ、があて啼なけば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

また、からすあ、があて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

また、からすあ、があて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

.....

ひとかたまりの童児わらわ、広い野はらに火三昧ひざんまいして遊びふけて
いたずおん。春になればし、雪こ溶け、ふろいふろい雪の原のあ
ちこちゆ、ふろ野の黄はだの色の芝生こさ青い新芽の萌えいで来
るはで、おらの国のわらわ、黄はだの色の古し芝生こさ火をつけ、
そればさ野火と申して遊ぶのだおん。そして案配あんばいこ、おたがい
野火をし距へだて、わらわ、ふた組にわかれていたずおん。かたかた
の五六人、声をしそろえて歌ったずおん。

——雀、雀、雀こ、欲ほうし。

ほかの方図ほのわらわ、それさこた応え、

——どの雀、欲ほうし？

て歌つたとせえ。

そこでもつてし、雀こ欲うして歌つた方図のわらわ、打ち寄り、もめたずおん。

——誰をし貰ればええべがな？

——はにやすのヒサこと貰れば、どうだべ？

——鼻たれて、きたなきも。

——タキだば、ええねし。

——女くされ、おかしじやよ。

——タキは、ええべせえ。

——そうだべがな。

そうした案配こ、とうとうタキこと貰るよきにきまつたずおん。

——右^{みぎ}りのはずれの雀こ欲うし。

て、歌ったもんだずおん。

タキの方図では、心根つこわるくかかったとせえ。

——羽こ、ねえはで呉れらえね。

——羽こ呉れるはで飛んで来い。

こちらで歌ったどもし、向うの方図で調子ばあわれに、また歌つたずおん。

——杉の木、火事で行かえない。

したどもし、こちらの方図では、やたら欲しくて歌ったとせえ。

——その火事よけて飛んで来い。

向うの方図では、雀こ一羽はなしてよこしたずおん。タキは雀

こ、ふたかたの腕こと翼みんなに拵げ、ぱお、ぱお、ぱお、て羽ばたきの音をし口でしやべりしやべりて、野火の焰よけて飛んで来たさせえ。

これ、おらの国の、わらわの遊びごとだおん。こうして一羽一羽と雀こ貫るんだもし、おしめに一羽のこれば、その雀こ、こんど歌わねばなんねのだおん。

——雀、雀、雀こ欲うし。

とつくと分別しねでもわかることだどもし、これや、うたて遊びごとだまさね。一ばん先に欲しがられた雀こ、大^{おおはば}幅こけるどもし、おしめの一羽は泣いても泣いても足^たえへんでは。

いつでもタキは、一ばん先に欲しがられるのだずおん。いつでも

もマロサマは、おしめにのこされるのだずおん。

タキ、よろずよやの一人あねこで、うって勢よく育つたのだずおん。誰にかても負けたことねんだとせえ。冬、どした恐ろしい雪の日でも、くるめんば被^{かぶ}らねで、千^{せんなり}成^{りんご}の林檎こよりも赤え頬^ほぺたこ吹きさらし、どこさでも行けたのだずおん。マロサマ、たかまどのお寺の坊主^{ぼんず}こで、からだつきこ細くてかそぺないはでし、みんなみんな、やしめていたのだずおん。

さきほどよりし、マロサマ、着物ばはだけで、歌っていたずおん。

——雀、雀、雀こ欲うし。雀、雀、雀こ欲うし。

不憫^{ふびん}げらに、これで二度も、売えのこりになつていたのだずお

ん。

——どの雀、欲うし？

——なかの雀こ欲うし。

タキこと欲しがるのだけずおん。なかの雀このタキ、野火の黄色え黄色え焰ごしに、悪だまなくこでマロサマにらば睨めたずおん。

マロサマ、おつとらとした声こで、また歌つたずおん。

——なかの雀こ欲うし。

タキは、わらわさ、なにやらし、こちよこちよと言うつけたずおん。わらわ、それ聞き、にくらにくらて笑い笑い、歌つたのだけずおん。

——羽こ、ねえはで呉れらえね。

——羽こ呉れるはで飛んで来い。

——杉の木、火事で行かえない。

——その火事よけて飛んで来い。

マロサマは、タキのぽおぽおて飛んで来るのば、とっけらとして待つていたずおん。したどもし、向うの方図で、ゆつたらと歌るのだずおん。

——川こ大水で、行かえない。

マロサマ、首こかしげて、分別したずおん。なんて歌つたらええべがな、て打つて分別して分別して、

——橋こ架けて飛んで来い。

タキは人魂ひとたまみんな眼まなくこおかなく燃やし、独りして歌つたずお

ん。

——橋こ流えて行かえない。

マロサマは、また首こかして分別したのだずおん。なかなか分別は出て来ねずおん。そのうちにし、声たてて泣いたのだずおん。泣き泣きしやべつたとせえ。

——あみださまや。

わらわ、みんなみんな、笑つたずおん。

——ぼんずの念仏、雨、降つた。

——もくらもつけの泣けべつちよ。

——西くもて、雨ふつた。雨ふつて、雪とけた。

そのときにし、よろずよやのタキは、きずきずと叫びあげたと

せえ。

——マロサマの愛めごこや。わのこころこ知らずて、お念仏。あわれ、ばかくさいじやよ。

そうしてし、雪だまにぎて、マロサマさぶつけたずおん。雪だま、マロサマの右りの肩さ当り、ぱららて白く砕けたずおん。マロサマ、どってんして、泣くのはやめてし、雪こ溶けかけた黄はだの色のふる野ば、どんどん逃げていったとせえ。

そろそろと晩げになつたずおん。野はら、暗くなり、寒くなつたずおん。わらわ、めいめいの家さかえり、めいめい婆ばさまのこたつこさもぐり込んだずおん。いつもの晩げのごと、おなじ昔むかし

嘶こをし、聞くのだずおん。

長え長え昔嘶むがしこ、知らへがな。

山の中に橡の木いつぽんあつたずおん。

そのてつペンさ、からす一羽来てとまったずおん。

からすあ、があて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

また、からすあ、があて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

また、からすあ、があて啼けば、橡の実あ、一つぼたんて落づるずおん。

.....

青空文庫情報

底本：「太宰治全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年8月30日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：丹羽倫子

1999年9月12日公開

2005年10月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雀こ

井伏鱒二へ。津軽の言葉で。

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 太宰治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>